

日本の行政ノウハウをインドネシアへ

シンガポール事務所

クレアシンガポール事務所は2015年12月14日からの17日にかけてインドネシア・スラバヤ市からの要請に基づき、専門家派遣事業を実施しました。

専門家派遣事業は日本の自治体が持つ行政ノウハウを海外の自治体に移転し、今後の交流の端緒とするため、日本から自治体職員を現地に派遣し、講義や実技を通して知識技能を伝える事業です。

今回、スラバヤ市から要望があったのは、「河川における環境保全」分野に関する専門家の派遣で、奈良県景観・環境局の職員が専門家として4日間にわたり現地では指導を行いました。

1 インドネシア・スラバヤ市とその河川の状況

スラバヤ市は東ジャワ州の州都で、人口約310万人のインドネシア第2の都市です。また周辺都市からの通勤者通学者も多く、昼間人口は500万人ともいわれており、人口の集積及び都市化に伴う様々な課題も生じています。

とりわけ飲用水の水源として利用される市内河川の水質汚濁は深刻な問題になっています。このことはスラバヤ市が発展の過程で川沿いに住居や工場が集積したことや、港湾都市で河川の下流に当たるため上流からの汚染が蓄積しやすいことが原因と考えられています。

現在、スラバヤ市では工業商業施設それぞれが排水処理設備を備えており、排水はそれぞれの施設で処理されてから河川に放出されています。河川に排水するためにはスラバヤ市からの「排水廃棄許可」が必要で、それぞれの排水設備の処理能力や排水量から排水許可量が認定されています。

しかしながら、排出先である各河川がどの程度汚染物質を許容できるかという負荷容量を把握できていないため、河川の汚染状況が進行しているという現状があります。このことから今回の専門家派遣の要望が寄せられることとなりました。

2 専門家派遣事業経過

派遣初日はスラバヤ市環境局長官よりスラバヤ市の概要と河川汚濁状況について説明があり、その後実際に市内河川の視察を行いました。スラバヤ市では市民の飲用水の80%を市内河川から取水するとのことですが、家庭からの生活排水の98%が

全く処理されず河川にそのまま排水されているとのことで、スラバヤ市の河川は濁りやゴミが多く、一見して日本の河川とは異なる状況を見てとることができました。また、その川で泳ぐ子どもがいたり、食用とするための魚を釣ったりしており、健康被害の懸念も感じました。



市内河川の視察の様子

(左：スラバヤ環境庁職員から説明を受ける専門家、右：市内河川で釣りをする住民)

次の日から3日間にわたり専門家による講義をとおして日本における排水規制法制、各種データの測定方法や負荷容量の算定等をスラバヤ市環境局職員に紹介しました。

スラバヤ市からは直接河川の水質を管理する環境局からの職員をメインに、清掃局や計画投資庁などの関係機関からの職員を加え約15名の参加がありました。参加者は非常に意欲的で、納得できるまで次々と専門家に質問し議論が白熱しました。やはり行政的観点からの質問が多く、例えば「浄化槽の設置や管理はだれに責任があるのか」「費用はどのように負担されるのか」「違反した場合には実務上どのように対応・処罰しているのか」といった自治体の職員ならではの質問が多く聞かれました。

日本と海外の自治体が都市の課題について協議する場合、両国間で前提となる状況が異なるため、一方的に日本のノウハウを伝えるだけでは課題解決にはつながりません。今回のテーマは河川の環境保全でしたが、そもそもスラバヤ市に下水道が存在しなかったり、排水規制の日本的な考え方が理解されなかったり、前提に差を感じることもありました。しかしながら、今回のように専門家と参加者が活発にやり取りできる環境を作ることによって、お互いに納得できる質の高いコミュニケーションによって徐々に双方のギャップを埋めることができると感じました。

今後のスラバヤ市の河川の水質改善と両国自治体の関係深化に、今回の専門家派遣事業が貢献できることが期待されます。



専門家による講義の様子

(加藤所長補佐 北九州市派遣)

